

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 商 兆琦

本論文「明治時代の知識人と足尾鉍毒事件——「近代性」問題への思想史的接近」は日本の明治時代に活躍した知識人の言説を通して、東アジアにおける近代性を思想史的に検討するものである。その具体的事例として、著者は足尾鉍毒事件を取り上げる。東アジアの伝統的教養の中で育った明治知識人たちが近代西洋と思想的に出会った結果、近代工業化に伴って生じた事件に対してどのような言論活動・実践活動を展開したかを分析し、「近代性」(モダニティ)について考察を加えている。

論文は序章と7つの章、および終章とからなる。序章では問題意識と論文構成・分析手法が叙せられる。著者は21世紀を生きる中国人として中国の「近代性」の問題を考察することを目的に立て、そのために「方法としての日本」として明治知識人を研究対象に選んだという。第1章から第4章はまとめて第1部「田中正造研究」と題される。足尾鉍毒事件で言論・実践両面で最も活躍した田中正造を取り上げ、先行研究の問題点を彼の思想形成に遡ってあらためて検証することによって明らかにし、「無学」をキーワードとして彼の思想世界を読み解いていく。第5章から第7章は第2部「明治知識人研究」として、勝海舟と福沢諭吉、島田三郎と陸羯南、内村鑑三と幸徳秋水をそれぞれ組み合わせて比較し、論じている。鉍毒事件に対する各人の態度の多様性を明治知識人が直面していた「近代性」問題と捉え、類型分類による一般化を試みている。終章は以上を総括し、田中正造の思想に典型的な伝統から近代への過渡的様相を、中国の近代性問題を考察するうえで活かしていく必要性を説いて結ばれている。

田中正造に対するステレオタイプな見方を実証的に批判し、広く明治知識人を横並びにして彼らの近代性問題を論じ切った点で、本論文には学術的な価値がある。著者が志している中国近代再考作業への布石として方法的にも有効である。ただ、著者は「近代性」の今日的課題を丸山真男が主張した市民社会論に依拠して論じており、この点には問題が残る。また、本論文では日本思想研究に終始していて中国についての実証的検討は今後に残されているが、口頭試問においてその見解が披露され、その問題意識と今後の研究活動の方向性を審査委員会として確認した。本論文は著者が日本留学で得た知見をまとめた研究成果として高く評価できる。

以上により、審査委員会は博士(文学)の学位を授与するにふさわしい水準に達しているとの結論に達した。